

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月6日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530196

研究課題名（和文） ワルラス社会経済学の解明 - 効率と公正の両立をめぐる

研究課題名（英文） Walras' s Social Economics - in quest for Efficiency and Social Equity

研究代表者

御崎 加代子 (MISAKI KAYOKO)

滋賀大学・経済学部・教授

研究者番号：90242362

研究成果の概要（和文）：ワルラスの正義の体系である社会経済学が、自由競争の効率性を証明した純粋経済学（一般均衡理論）とどのような関係にあるのか、その形成過程に注目して、ワルラスが効率と公正との両立をどのように実現しようとしたかを解明する。特に、社会経済学の主要な主張である土地国有化の根拠として、ワルラスが父オーギュストから受け継いだ稀少性概念に注目し、純粋経済学においてそれが理論的に変容した後も、政策的意図においていかに連続性を維持し続けたかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research aims to clarify how Leon Walras sought to compatibility of efficiency in his pure economics and social equity in his social economics. For this purpose, we focuses on the continuity between Auguste (his father) and Leon 's two concepts of rarete (scarcity) in their intentions. Even after Léon Walras gave to his father' rarete a new definition as marginal utility, he continued to believe it to be a theoretical basis for the justification of nationalization of land like his father all his life.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学、経済学説・経済思想

キーワード：ワルラス・経済学史

1. 研究開始当初の背景

ワルラスの社会経済学の解明は、ワルラス

の現代経済学への主要な貢献とみなされている純粋経済学(一般均衡理論)を、理論的にも思想的にも、より深く理解するために必要不可

欠である。

ワルラスは、主著『純粋経済学要論』（初版 1874-77 年）の出版によって、一般均衡理論の創設者として経済理論史上、不動の地位を築いた。しかしながら彼の経済学体系は、真理を追求するための「純粋経済学」、正義を追求するための「社会経済学」、効用を追求するための「応用経済学（効用）」という三つの分野から構成され、それぞれの内容を知らずして、ワルラス経済学の真の意義を知ることはできない。

残念ながら、ワルラスが完成させたのは、純粋経済学のみで、社会経済学に関しては、論文集『社会経済学研究』（初版 1896）が残されているだけである。

ワルラス・モデルがやがて新古典派経済学として普及し、それによって、ワルラシアン・エコノミックスがややもすれば市場万能主義と誤解される現代において、元祖であるワルラスそのひとが、効率と公正の両立にいかにか真摯に取り組んだかを知ることは、大きな意義をもつと思われる。

この研究が、社会思想、経済学史、理論経済学の研究と多くの問題意識を共有し、新たな研究成果が生まれることは確実であり、また 2010 年はワルラス没後 100 周年であり、これを記念する研究テーマとしてもふさわしいと考えた。

ところで、ワルラスの『社会経済学研究』については、残念ながら日本語訳はまだ存在しない。英語訳は、Donald Walker 教授と Jan van Daal と教授により 2010 年 3 月に Routledge 社から出版された。この二人とも緊密な連絡をとりながら、『社会経済学研究』の日本語訳に取り組み、本研究成果を踏まえて、訳注を充実させることを計画した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、レオン・ワルラスの経済学体系の一部である社会経済学の意義を、その成立過程に注目することによって解明し、ワルラスの業績として有名な一般均衡理論（純粋経済学）とその理論的、思想的関連に新しい光をあてることである。

社会経済学は、所有と税の理論を扱っており、ワルラスが公正と効率の両立という、経済学における永遠のテーマにどのように取り組んだのかを示すことができる。これによって、ワルラス経済思想の歴史的意義だけでなく、ワルラスを源流とする現代経済学の再解釈や今後の可能性をも示唆することが目的である。

3. 研究の方法

(1) 経済学史にかかわる図書の購入とその検討・・・ワルラスと社会経済学にかかわる経済学史上の文献（著作集および研究文献など）を購入する。

(2) 経済学史にかかわる古書の購入とその検討・・・新刊書では入手しにくい文献については古書により購入する。

(3) 以上の資料を検討しつつ、『社会経済学研究』の翻訳作業を進め、ワルラスの社会経済学の成立過程とその思想的背景についての論文を作成する。同論文は英語で作成するために、校閲が必要となる。

(4) 完成論文は、2012 年 9 月にフランスのツールーズで開催される国際ワルラス学会 (AIW) で報告すると同時に、学術雑誌などでも発表する。『社会経済学研究』の翻訳は、国内で出版する。

4. 研究成果

(1) 本研究では、社会経済学の主要な主張である土地国有化の根拠として、ワルラスが父オーギュストから受け継いだ「稀少性」概念に特に注目し、父子の理論的断絶性と政策的意図における連続性を明らかにした。

ワルラスは、純粋経済学における一般均衡理論によって、自由競争の効率性を証明し、現代経済学の基礎を築いた。これを達成するために、彼は、限界効用理論を導入した。この消費者行動に基づく主観的なアプローチは、新古典派の創設者としてのワルラスの重要な貢献の一つであると一般的にみなされている。たとえば、ワルラスの一般均衡理論を高く評価し、ワルラスの経済理論史の地位を決定づけた、シュンペーターは、フランスには、コンディヤックや J.B.セーなどの効用価値理論の伝統があり、ワルラスの限界効用理論もこの伝統に属すると主張していた。労働価値論を基礎とした古典派がジェヴォンズ革命によって主観的な限界効用理論にとってかわられたイギリスとは対照的に、フランスの経済学者たちは、常にこの効用価値理論の影響下にあったというのがシュンペーターの主張である。

しかしながら、本研究が注目したのは、ワルラス父子が、イギリスの労働価値論とともに、フランスの効用価値論を終生、激しく批判していたという事実である。父オーギュストは、稀少性に基づいた独自の価値論を構築し、息子レオンは、それを受け継いだ。彼は、やがてそれに限界効用という新しい意味を与えたが、父にならって「稀少性」と呼びつづけた。なぜなら、その概念は所有制度の改革に根拠を与えるという、父から受け継いだ役割を担っていたからである。

ワルラス父子は、稀少性に基づく価値論の

みが、土地国有化の根拠となりうると信じていた。父オーギュストは、J.B.セーの効用価値論に正義の観点が見地から欠如していることを批判する際に、その主観的なアプローチが、所有理論の首尾一貫した根拠となりえないことを主張していた。そのため、「稀少性」という客観的な見地から価値を論じようとした。

オーギュストは、稀少性概念を、「絶対需要(財に対する消費者全体の欲望の合計)」と「絶対供給(財の存在量)」の比率としてあらわした。分母である「絶対供給」のみならず、分子である「絶対需要」もまた、各人の欲望を一と数えることによって、確定可能な量となると考えていた。効用という測定不可能な価値尺度を拒否し、このような客観的で巨視的な価値概念を基礎におくことによって、はじめて社会的正義の見地から、所有理論を論じることができる、オーギュストとは信じていたのである。しかし、各人の欲望を一ととらえる前提から脱却できなかったオーギュストとは、首尾一貫した価格理論を完成させることはできなかった。

レオン・ワルラスは、同僚の力学教授の助けを借りて、限界効用理論に到達し、父がぶつかった壁を乗り越えることができたが、正義の観点からセーの経済学を批判することを生涯やめなかったのである。このワルラスのセー批判は、『純粋経済学要論』の随所で見出すことができる。

レオン・ワルラスは、限界効用という主観的なアプローチに到達することによって、一般均衡理論の構築と、最大満足の原理に基づいた、自由競争の効率性の証明に成功した。しかしながら、レオンにとって、純粋経済学の最も重要な目的は、「進歩する社会における価格変動の法則」すなわち、経済進歩に伴って地代と地価だけが上昇するという父から受け継いだ仮説を証明することであった。これら二つの原理の証明によって、効率と公正が両立する経済システムを提示することができたのである。

実は、『純粋経済学要論』における、これら二つの部分の関係こそが、いわゆるジャッフェ＝森嶋論争の争点であった。『要論』における静的な一般均衡理論と、進歩を論じた動的な部分のどちらがより本質的な部分なのか、彼らの論争の的となった。ジャッフェは、ワルラス・モデルにおける規範的な要素を指摘することによって、前者の重要性を主張し、一方、森嶋は、ワルラスの意図が現実の科学的描写のための実証モデルを構築することであったと指摘し、後者の重要性を主張した。両者は、いずれもワルラスの真の政策的哲学的意図を無視していると言える。ジャッフェは、ワルラスの社会経済学の意義やそれが純粋経済学構築に向かわせたインセンティブの大きさを過小評価している。森嶋は、もっぱ

ら理論的な見地から、『要論』の動学的な部分の重要性を評価し、ワルラスがリカードから得た影響や、ワルラス理論のケインズ理論への発展可能性を指摘した。

ワルラスの純粋、社会、応用経済学の経済学体系の構想に注意を払うことなく、一般均衡理論の形成過程に注目すると、ワルラスの真の意図を見失うことになってしまう。彼にとって経済学の最も重要な目的は、効率と公正の両立という極めて現代的な課題である。現代の新古典派経済学の伝統は、ワルラスの貢献の中のきわめて限定的な部分に基づいているということを忘れてはならない。

このように、ワルラス父子の「稀少性」概念における、理論上の断絶のみならず意図における連続性を明らかにすることにより、ワルラスの純粋経済学と社会経済学の意義に新しい光を投げかけることができるのである。

(2) 本研究に対する直接的な反響は、まずこれをテーマとした論文を発表した国際ワルラス学会において、討論者の Jean-Pierre Potier 教授(リヨン第2大学)たちから得られた。

その際、浮上した今後の課題は、オーギュスト・ワルラスの J.B.セーに対する解釈をより詳細に再検討する必要があるということ、レオン・ワルラスが限界効用理論に到達するまでの過程をより詳細に示す必要があるということである。

また同論文が掲載された著書については、今後、書評が逐次、専門誌に掲載される予定であり、そこでまた別の反響が得られるはずである。

(3) ワルラスの『社会経済学研究』の翻訳作業は研究期間中に終了させることができなかった。これについては、現在も継続してとりくんでおり、数年以内に国内で出版する予定である。

また本研究テーマと直接的な関連はない業績ではあるが、UNESCO が編纂している世界最大の教育研究知識ベースである、科学百科事典 EOLSS にも「ワラシアン経済学の歴史、哲学、発展」という項目で 2012 年に寄稿し、社会経済学に関する詳細な解説をもちこんだ。

(History, Philosophy, and Development of Walrasian Economics, 6.28.38 the *Encyclopedia of Life Support System* (EOLSS), the UNESCO, 2012.)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 1 件）

Kayoko MISAKI, Transforming of rarete?-
From Auguste to Leon Walras,
International Walras Association,
September, 14,2012, Toulouse, France.

〔図書〕（計 1 件）

Kiichiro YAGI & Yukihiro IKEDA (eds.) ,
Routledge, Subjectivism and Objectivism in
the History of Economics Thought,2012,
216p. (pp.59-72)

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

御崎 加代子 (MISAKI KAYOKO)
滋賀大学・経済学部・教授
研究者番号：90242362

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし